今野勝幸さん

女川の気になる地名

針浜 はりのはま

写真撮影・構成　三宅哲

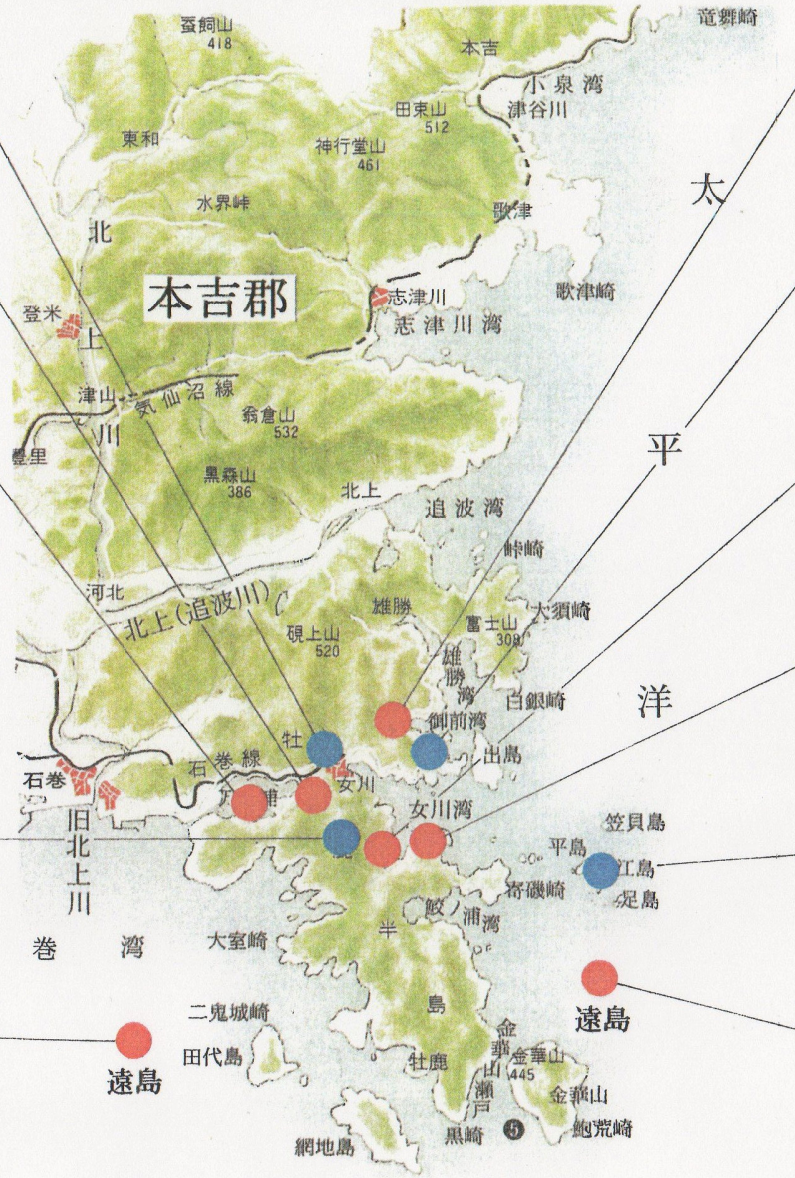
三 宅 宗 議

日：2018（平成 30）年 10 月 20 日

所：宮城県女川町生涯学習センター

②女川の気になる地名

●古代　●中世



女川浜　おながわはま

安部一族が逃れ、子女が川の水を使った。

針浜　はりのはま

後醍醐天皇の皇子の“皇居”があった。

奥海　おくのうみ

陸奥国府多賀城の奥の地域の海を言い、その海道筋の海を「奥ノ海」と言う。中世の歌人に詠まれた。江戸時代の村々の風土記に名所として記されている。仙台藩二代藩主・伊達忠宗によって万石浦と改められた。

大六天山　だいろくてんざん

全甫和尚が第六天山三国寺を創建した。

遠島　としま

桃生郡と牡鹿郡の海岸部を言った。郡と並ぶ行政地名であった。

御前浜　おんまえはま

百済王敬福が来た。

尾浦　おうら

もと王浦と言った。千葉大王が居住した。

横浦　よこうら

伊達政宗の命令で、舟で物資を運んだ。

塚浜　つかはま

護良親王にお伴した白幡大納言が逃がれて来た。ここにお墓がある。

江島　えのしま

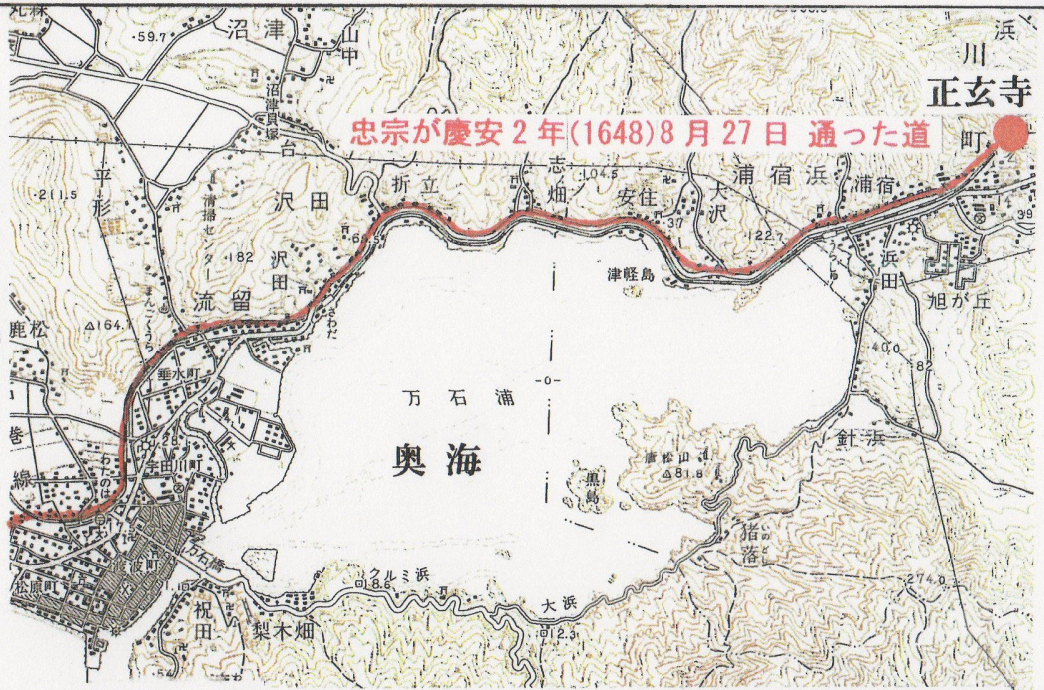
平泉藤原氏の一族　樋爪五郎が逃げのびてきた。

遠島　としま

桃生郡と牡鹿郡の海岸部を言った。遠島甚句はこの地域の舟人の歌。

③奥海（おくのうみ）は古代陸奥（みちのく）の“奥なる海”とされた―国府多賀城の奥の海道筋にその海があった。

後に、仙台藩主 伊達忠宗は「万石浦」に変えた。



雲の波八重たつ方の おくの海の 今あらはるる あさなぎの雲
（冷泉為尹）

――万石浦はむかし奥の海と言われた（写真撮影・構成　三宅哲）

渡波町

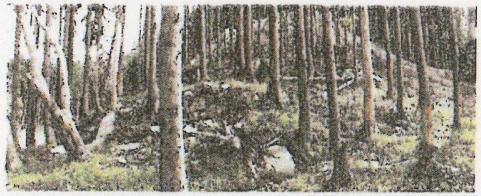
万石浦西岸の砂洲上に立地。北は沢田村・根岸村本郷に接し、西は湊村鹿妻に接する街村。「安永風土記」に「奥海入江口波折渡之跡自然と汐干潟陸地ニ罷成、天文年中之比より段々御百姓住居仕候ニ付、波渡之跡村ニ罷成候間、渡波町と申唱候由申伝候事」と記されています。

表1 「おくのうみ」を詠み込んだ作者と作品

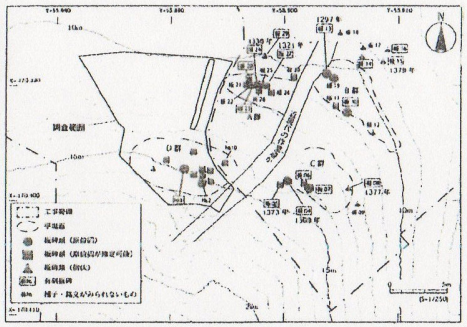
番号	作者名	詠歌	出典	撰録	
1	藤原定家	たづねいるつらきこころのおくのうみよしほひのかたのいふかひもなし	新古今集	建仁元年	(1201)
2	順徳院	うしとても身をばいづくにおくのうみのうのゐるいはもなみはかくらん	続古今集	承久3年	(1221)
3	藤原長綱	吹きかへすしほかぜさむしおくの海のいはねにたてる鶴の羽衣	前権典厩集	嘉禄2年	(1226)
4	後鳥羽院	我がためはつらきこころの奥の海にいかなるあまのみるめかるらむ	後鳥羽院御集	健保4年	(1216)
5	藤原家隆	はるる夜はいくへか霜もおくのうみの河原のちどり月恨むらん	寛元3年	寛元3年	(1245)
6	藤原家隆	おくのうみやえぞが岩やの煙だに思へばなびく風や吹くらん	壬二集	寛元3年	(1245)
7	藤原家隆	さゆる夜はいくへか霜もおくの海のかはらのちどりふけてなくなり	夫木抄	延慶3年	(1310)
8	藤原為家	おくのうみしほしのかたにたづねてもかひなきこひに身をやつくさん	風葉和歌集	文永8年	(1271)
9	実空	尋ねてもあだし心のおくの海の荒き磯辺はよる舟もなく	続後拾遺集	弘安元年	(1278)
10	藤原為相	夜をさむみつばさに霜やおくのうみの河原の千鳥深けて鳴くなり	新千載集	嘉元元年	(1303)
11	忠房親王	契りても心をばなおおくの海のふかくば人をたのむものかは	藤葉集	康永3年	(1346)
12	九条実教	おくの海の鵜のゐる石のいっとなくぬれてかはかぬ袖の上かな	南朝五百番	康永元年	(1343)
13	九条実教	奥の海の鵜のゐる岩のなみよりは契らぬよはの袖ぬらしける	南朝五百番	嘉禎元年	(1235)
14	宗良親王	あじきなや君に心をおくの海よえぞなづさはぬえぞがちしまも	新葉和歌集	弘和元年	(1381)
15	三条実隆	行く舟も春はかすみのおくのうみやしほひのみちもいかにわくらん	雪玉集	―	(―)
16	冷泉為尹	雲の浪八重たつ方のおくの海の今あらはるるあさなぎの空	為尹千首	応永22年	(1415)
17	三条西公保	かけひかぬ人の心のおくの海の海士のたてなはつくときぞなき	永享百首	永享元年?	(1429?)
18	足利義教	おなじくにおもふ心のおくの海を人にしらせでしづみはてなん	新続古今集	永享11年	(1439)
19	正徹	おくの海思ふ心のはし舟もまだ打出でぬ波のはげしさ	草根集	長禄3年	(1459)
20	肖柏	おくの海千里の波にいざよふや秋のしまねのよその月影	春夢草	―	(―)

④女川には 中世の文化財（板碑）が多い

板碑（いたび）は主に武士層が建てた供養塔である。



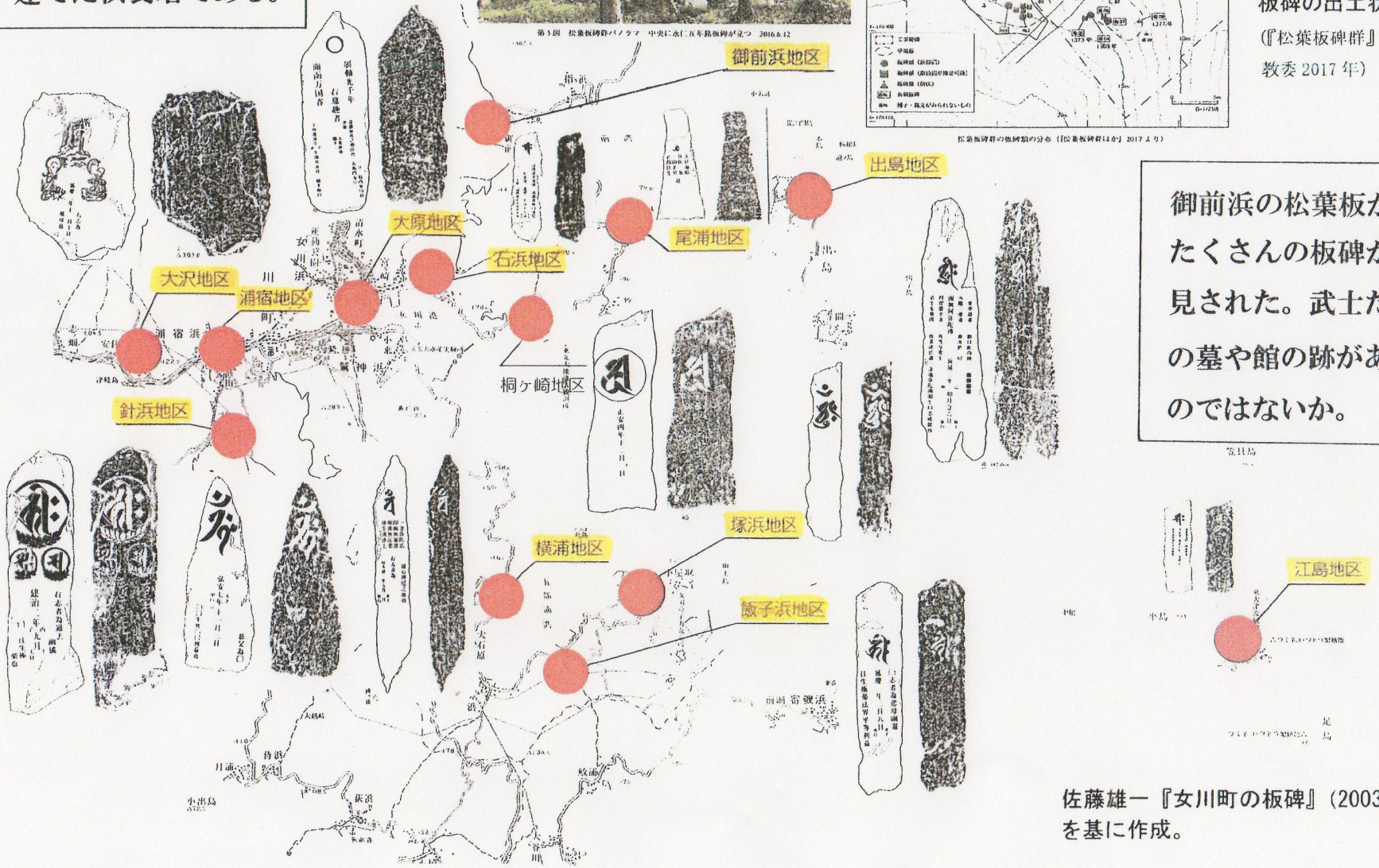
第5図　松葉板碑群パノラマ　中央に永仁五年銘板碑が立つ　2016.6.12



松葉板碑群の板碑類の分布（「松葉板碑群ほか」2017 より）

板碑の出土状況
（『松葉板碑群』女川町教委 2017 年）

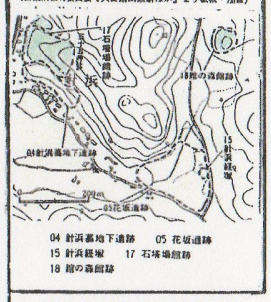
御前浜の松葉板からたくさんの板碑が発見された。武士たちの墓や館の跡があるのではないか。



佐藤雄一『女川町の板碑』（2003 年）を基に作成。

⑤南北朝期の牡鹿湊と針浜の地名

図25　館崎館跡全体図
（宮城県教育委員会『大貫館山館跡ほか』より転載・加筆）



『女川町誌続編』を加工して引用

南北朝期の牡鹿湊

○暦応元＝延元３(1338)、
義良親王、顕信、顕能、結城宗広らが伊勢の大湊から乗った船が時化に遭った。顕信の父北畠信房は牡鹿か宇多に着いたかと尋ねた。

○暦応３＝興国元(1340)年６月ごろ、常陸にいた顕信は海路牡鹿郡に入り、葛西、河村、南部各氏を糾合して多賀国府の奪還をねらう。

○興国３(1342)年３月21日
葛西惣領清貞、甥の遠江守清明を成敗した。顕信は24日の御教書で「喜悦」云々と言った。

南北朝期の針浜の伝説

○元弘・建武(1331-1356) のころ、後醍醐天皇の皇子が左遷されて針浜を「皇居」とした時、神祖彦火火出見尊の旧跡を日向から残らず移した。旧跡名は、鵜島、神社場崎、巴島、巴山、鵜羽神社、陰の土地。

○彦火火出見尊が兄の釣針をなくし赤目の口から見つけた故事にちなみ、村名を針浜と名づけた。

地名

- 殿畑
- 豊後畑
- 丹後畑
- 馬立
- 大納言館
- 帝屋敷

矢口清志氏の牡鹿湊説

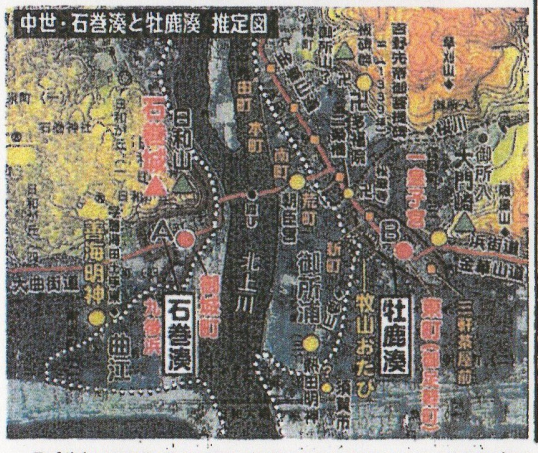


図1「デジタル標高図」(国土地理院)　「地盤」の高さから推定したもの。九後浜のA「石巻湊」とB「牡鹿湊」は自然堤防(微高地)に位置する。図3、図5からも「曲江・御所浦」一帯は洪水・高潮の被害が予想される「氾濫原」であり、元々人間が住んではいけない土地だった。

矢口清志「永遠の南浜・門脇の“葛西湊”の所在地を探る」(石巻日日新聞 2018 年 9 月 6 日号)

⑥針浜の地名伝説の背景に合戦があった

葛西宗清、清貞ら、南朝側の武将として足利尊氏らと戦う。

元弘三年(一三三三)義良親王を奉じて多賀国府へ下向した北畠顕家は、翌々建武二年(一三三五)には葛西宗清・清貞父子、伊達氏・南部氏・相馬氏・結城氏らの東国武将を率いて足利尊氏追討に西下、宗清は延元元年(一三三六)戦死した。惣領清貞は翌々三年一月、再び顕家に従って足利氏攻略に参加、同年五月の顕家戦死後は石巻城に戻った。同年七月顕家の弟顕信は父親房とともに義良親王を奉じて海路奥州へと向かったが、途中台風に遭って四散、親王・顕信らは伊勢へ戻り、親房は常陸に漂着した。清貞は親王一行を迎えるため、湊村の牧山南麓に施設を造営。御所入・御楼居・殿士小路・大門崎などの地名はその名残という(石巻市史)。延元四年後醍醐天皇死去の報に接した葛西清貞は、湊村吉野の日輪寺(現吉野町多福院)境内に「吉野先帝菩提碑」を建立したと伝える(宮城県史)。

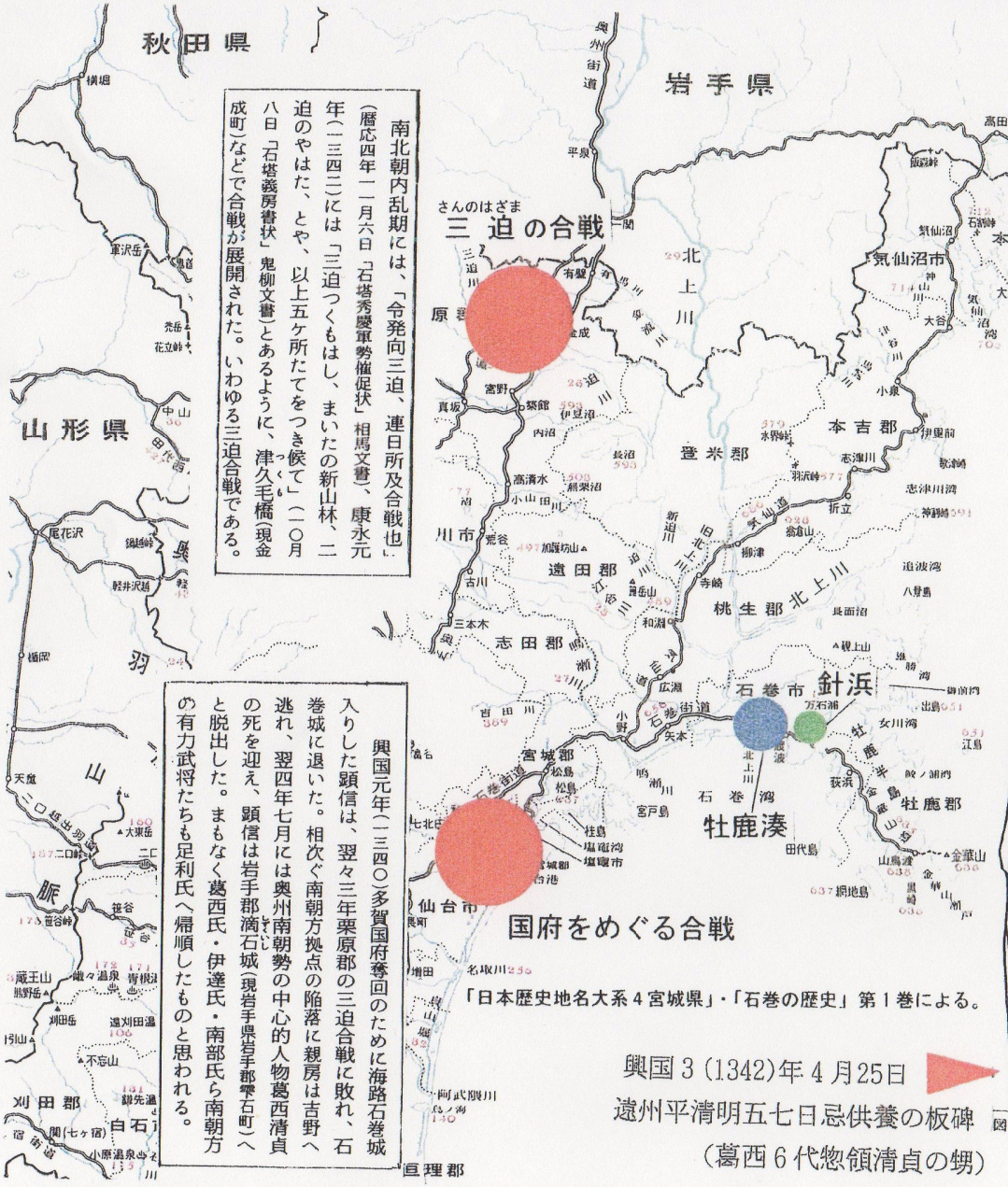
北畠顕信は父親房とともに、義良親王を奉じて海路陸奥へ向かうが、台風のため牡鹿湊に着かず伊勢に戻った。

南朝方北畠顕信が多賀国府奪回をめざして、北方から攻め、北朝方奥州総大将石塔義房と撃突した三迫の戦の最中に「葛西姪、遠江守有別心之由、風聞之間、為惣領計、此間令討伐候了、一族等も悦喜」(結城文書、三月二十四日、北畠顕信御教書)と記されている「遠江守」が、葛西遠江守清明(清貞の弟の子か。石田悦夫「葛西系図」『石巻の歴史』第六巻特別史編、葛西系図の考証による)に比定すると、つじつまがぴったり合う(従って御教書の発給は興国三年三月二十四日)

葛西陣営の悲劇

「平清明」の板碑

(石巻市草刈山)



南北朝内乱期には、「令発向三迫、連日所及合戦也」(暦応四年一一月六日「石塔秀慶軍勢催促状」相馬文書)、康永元年(一三四二)には「三迫つくもはし、まいたの新山林、二迫のやはた、とや、以上五ケ所たてをつき候て」(一〇月八日「石塔義房書状」鬼柳文書)とあるように、津久毛橋(現金成町)などで合戦が展開された。いわゆる三迫合戦である。

興国元年(一三四〇)多賀国府奪回のために海路石巻城入りした顕信は、翌々三年栗原郡の三迫合戦に敗れ、石巻城に退いた。相次ぐ南朝方拠点の陥落に親房は吉野へ逃れ、翌四年七月には奥州南朝勢の中心的人物葛西清貞の死を迎え、顕信は岩手郡滴石城(現岩手県岩手郡雫石町)へと脱出した。まもなく葛西氏・伊達氏・南部氏ら南朝方の有力武将たちも足利氏へ帰順したものと思われる。

「日本歴史地名大系4宮城県」・「石巻の歴史」第1巻による。

興国3(1342)年4月25日

遠州平清明五七日忌供養の板碑

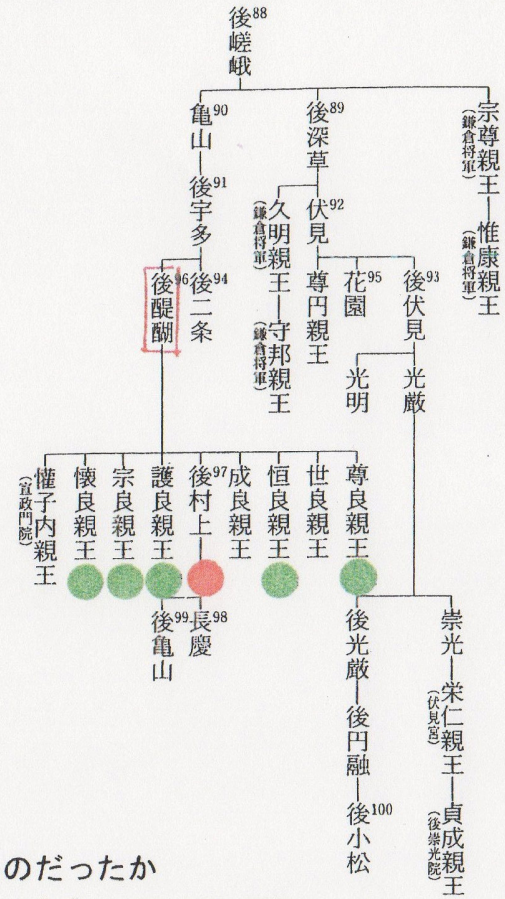
(葛西6代惣領清貞の甥)

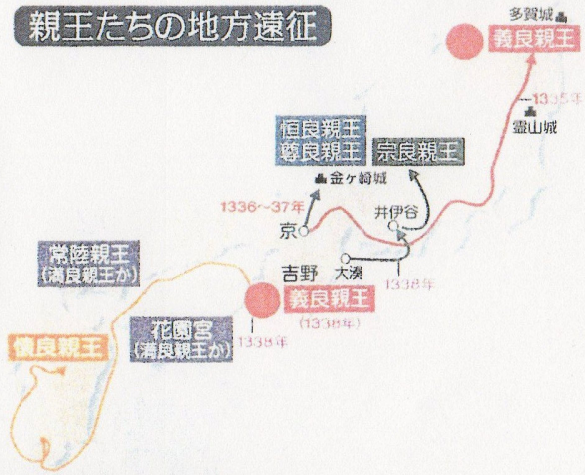
図6. 遠州平清明の供養碑
(湊 多福院)
(『石巻の歴史』第八巻より)

⑦ ●多賀国府に来た義良（のりよし）親王 ●後醍醐天皇は皇子たちを参戦させた

水野大樹『図解 観応の擾乱と南北朝の動乱』（スタンダーズkk 二〇一八年）より

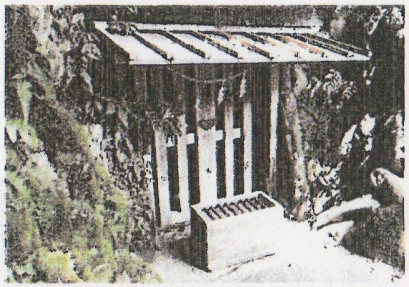
後村上天皇（来迎寺蔵）。後醍醐天皇の皇子。晩年は南北朝の和睦に向けて積極的だったとされる。●





藤原清貴『南北朝』（洋泉社 二〇一七年）より

牡鹿湊の葛西清貞が南朝軍に応援を求めた時、後村上天皇（当時義良親王）は11歳だった。

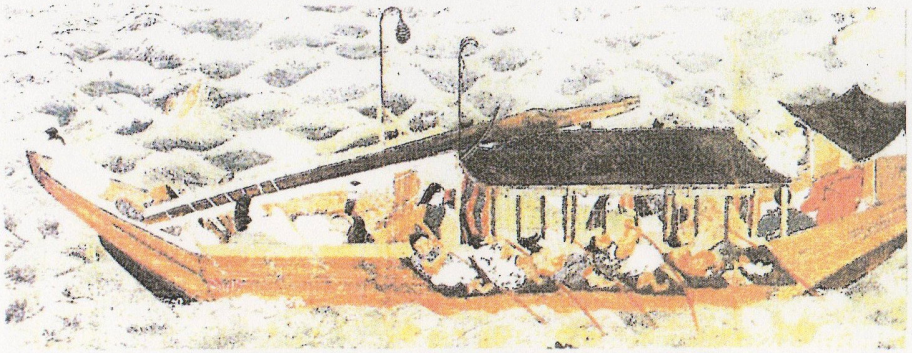


藤原清貴『南北朝』（洋泉社 二〇一七年）より

義良（のりよし）親王の海路による多賀国府行きはシケのため失敗した。

護良（もりよし）親王は鎌倉で謀殺された。伝説によれば親王が4人の家臣を伴って石巻に落ちのびたという。一皇子神社に祀られたとも。

伊勢大湊を出た軍船はこのようなものだったか



鎌倉期の『北野天神縁起』に見える大型船

⑧針浜に後醍醐天皇の皇子 義良（のりよし）親王は来なかった！

針浜

一村名に付由来　元弘建武之頃　後醍醐帝之皇子当国江左遷　当浜皇居之節　神祖彦火々出見尊之旧跡を悉当浜江被相移候由申伝候　乃彦火々出見尊兄君之釣針を御失被成赤目之口より針相出候故事ニより村名ニ唱候由申伝候　以下旧跡并名石滝等迄何茂其節日向国より当浜江被相移候由申伝候

（「宮城県史　安永風土記書上」による）

一名所　壱ツ

一奥　海　当浜都而海上を申唱候　又万石ケ浦共申唱候事

順徳院

うしとても身をいつくにか奥の海に鵜のゐる岩も波はかくらん

一旧跡拾五　鵜？

一鵜　島　葺不合尊御降誕之節鵜之羽を取候所と申伝候　今に鵜沢山ニ住候島ニ御座候事

一神社場崎　彦火々出見尊海宮ニ至り針を得給ひ八尋之鰐を駿馬と被成候所之由申伝候事

一巴　島　皇子当浜ニ皇居之地故此名義有之候由申伝候事

一巴　山　品々前条御書上仕候通ニ御座候事

一帝屋敷　皇子皇居之地と申伝候　当時ハ御百姓住居仕候事

一猪　落　日向国より子ニ当陰之土地ニ有之候　故往古陰之土地と申し唱候を後世相誤いのとしと申伝候　当浜端郷ニ名義相立居申候事

一観音堂跡　右堂何年之頃退転仕候哉年月不申伝候　当時ハ畑ニ罷成居候事

一経丸山　往古武日と申長者住居仕候由申伝候処年月相知不申候事

一采女屋敷　采女と申金掘住居仕候由申伝候処年月相知不申候　当時ハ野山ニ罷成居候事

一殿　畑　一花　畑　一馬　立　一陣之たわ　一豊後畑　一丹後畑

以上六ケ所由来相知不申候　何も畑之寄ニ罷成居候事

一鵜羽神社　葺不合尊御降誕之節産屋を葺候鵜羽相祭候由申伝候処誰勧請と申儀并年月共相知不申候事　鵜？

一大六天社

当郡湊村零羊崎神社之末社ニ而神功皇后三韓御平均以後干珠満珠之霊徳を御勧請之由ニ而云々

一古　館　弐ツ

一字丸館　南北弐拾弐間　東西弐拾間　一大納言館　南北弐拾間　東西弐拾間

右両所共ニ御館主并年月　相知不申候事

一滝　壱ツ

一御身洗滝　長八尺　幅四尺余

葺不合尊降誕之節産湯ニ奉引候所由申伝候事

一名石　一ツ

一籠　石　彦火々出見尊海宮ニ至リ給ふ時猿田彦命目無シ籠を捧給ふ候旧跡と申伝候事

一岩　三ツ

一御手跡岩　長九尺　幅四尺

猿田彦命御手跡有之候ニ付名付候由申伝候事

一名木　壱本

一唐　松　回り八尺余　日向国より伝来植立候由申伝候　右松之緑三本宛生シ申候　此所を緑ケ崎とも申唱候事

歴史の事実

- 元弘建武のころ（西暦一三三一～一三三五）は後醍醐天皇の在位期間である。天皇は足利勢との合戦に皇子たちを参戦させた。
- 当国へ来たのは第八皇子の義良（のりよし）親王である。
- 南朝側の武将葛西氏（清貞）は、義良親王の派遣を強く要請していた。

検証と推測

- 南朝軍は義良親王を奉じて伊勢大湊から牡鹿湊へ向かったが、大シケのため牡鹿湊へ着かなかった。

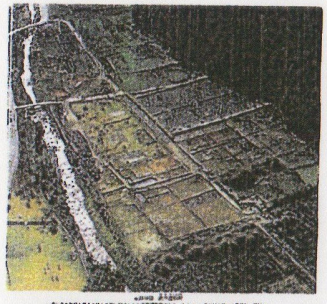
―しかし　事前に―

- 葛西氏（清貞）が義良（のりよし）親王らを迎え入れる施設を針浜に用意した。
- 「針浜」の地名と記紀伝説による地名は、葛西氏側が、当年11歳の親王のために名づけたものである。日向国には同名の地名はない。
- ただし、針浜にその施設跡の名称（―）が残っていたことは重要である。

⑨針浜の多数の遺構（いこう）は何を語るか？

- 南北朝時代、義良（のりよし）親王らを迎え入れるため作った施設跡ではないか。
- 義良親王は来なかったが、２年後に陸奥国司 北畠顕信らが一時駐在した可能性はあるかも。
- この施設は、牡鹿湊にいた葛西氏（清貞）が計画したものではないか。
- しかし、南朝勢力が敗退し、足利政権となると、この施設は必要がなくなったか。

〈参考〉福井県一乗谷 朝倉氏遺跡の遺構群



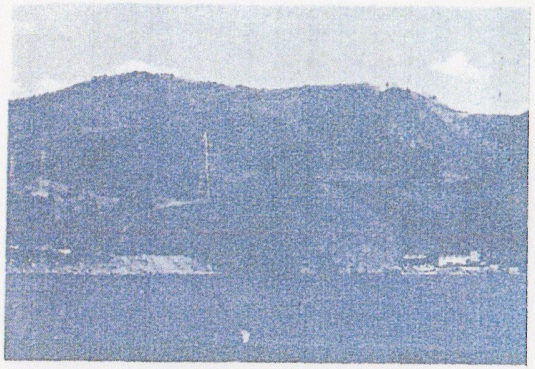
河原純之編『一乗谷遺跡』 日本の美術 No.二一四。

おすすめ

- 現地に行って、神話の地名を探そう。
- 不思議な地形を地図に書き込もう。
- 現地を整備して伝承公園にしよう。
- 考古学の調査で確かめよう。

石塔場館跡（南より）

（女川町教育委員会撮影）



館崎館跡（北西より）（鉄塔が見える一帯）

針浜地区には、性格不明な遺構（館跡か）が多数のこっている。それらは風土記書上に見える帝屋敷、大納言館などのどれに当たるのか調査する必要がある。また、これらの稀有な遺構を保存し顕彰する必要がある。

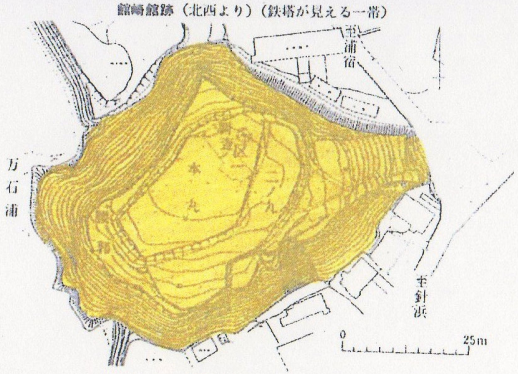


図25 館崎館跡全体図

（宮城県教育委員会『大川流域山館跡ほか』より転載・加筆）